

読者側からみる「ハリー・ポッター」

河井 恵理子

「ハリー・ポッター」は英国の作家 J.K.ローリングによって執筆された児童向けのファンタジーである。日本語版翻訳者は静山社の松岡佑子。物語は虐められる少年ハリーが主人公であり、11歳の誕生日に彼は自分が魔法使いであると明かされ、晴れて魔法学校に入学する。ハリーはそこで得た親友と共にそれ以前と一変して充実した学校生活を送り、時には危険な試練をも乗り越える。物語はハリー自身の出生の秘密を解明する経緯でもあり、17歳に成長したハリーは復活した闇の魔法使いと宿命の対決を果たす。物語は全7巻であり、1年ごと（5巻からは2年ごと）に1巻ずつ出版された。作中では1巻では1年生、2巻では2年生という具合に1巻につき1年間が経過するため、同年代の読者は主人公たちと一緒に成長していくことが出来る作品となっている。

「ハリー・ポッター」は1997年に英国で第1巻が発売されると、国内外で爆発的な売れ行きを示し、当時の販売部数は世界140カ国で1000万部を越えた。2007年に完結したシリーズ全7巻の販売部数累計は世界で4億部を越え、日本での日本語版全7巻の販売部数も2360万部と、異例の売り上げを見せた人気シリーズとなった。また、2001年から2011年にかけて映画も公開され、第1作「ハリー・ポッターと賢者の石」の日本での興行収入は203億円にもなった。2009年には物語の世界を再現した世界巡回展がシカゴで始まり、日本でも2013年に開催された。さらに、2010年には米フロリダのテーマパークで、2014年7月には大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンで物語の世界を舞台にしたエリアが開業された。このように原作の完結後も「ハリー・ポッター」の影響は根強く残っている。

従来の「ハリー・ポッター」を対象とした研究では、同作品が読まれた理由について考察するさい、主に作品の中の特徴をその理由として挙げてきたが、それらの研究は読者を対象とした調査に基づくものではないため、実証性の点で不十分である。本研究では、従来の文学研究的な手法に対して、読者を対象とした実証的調査を通じて「ハリー・ポッター」が読まれた理由を明らかにすることを試みた。調査手法としては、作品を読んだ経験のある20代半ばの男女14名を対象に、半構造化インタビューを実施した。これらの調査対象者は作品の内容を主人公たちと同年代として経験してきたことに特徴がある。調査の結果、これまで文学的な研究で指摘されてきた、設定や登場人物などへの共感といった作品に求められる理由のほか、読者自身やその家族の読書に対する価値観、映画のメディアミックスの効果などが、読まれた理由として詳細に明らかにできた。しかし、メディアミックスの効果はどの読者にも一様に及ぼされるわけではないなど、その効果の個人差についてはさらなる研究が必要である。

(指導教員 原 淳之)